



松平定信公による江戸時代のグリーンインフラ

～白河市 南湖公園～

1 賑わいのある観光地で絶滅危惧種の生育地

南湖公園は、年間 40 万人以上が訪れる、県南地方有数の観光地です^{※1}。寛政の改革を行ったことで知られる白河藩主・松平定信は、1801（享和元）年に湿地だった場所の土砂等を掘りあげ、堤を作り、今の南湖を作りました。門や柵もなく開放的な園地が広がる南湖公園は、日本最古級の公園としても知られ^{※2,3}、国の史跡・名勝に指定されています。歴史まちづくり法による歴史的風致維持向上地区計画が導入され、外観や屋根の構造に関するきめ細かいルールに従ったデザインの店舗群が並び、平日昼間でも観光客や市民で賑わっています。また、元々の自然や地形を活かして造園されたため、湿地や池の岸にカキツバタ、水中にトリゲモなど、絶滅危惧種が豊富に生育する生物多様性保全上重要な場所^{※4}、県立自然公園にも指定されています。



南湖公園内の湿地に生育する絶滅危惧種カキツバタ

2 松平定信公の先進性

松平定信が南湖造営に托した意図としては、(1)灌漑用水^{かんがい}の確保、新田開発のための条件整備、操舟訓練や水練場所の確保などの実用に供した、(2)自然の地形や景観を尊重してできるだけ手を加えず、自然と人工との調和を図った、(3)柵を設けず共楽亭を開放するなど土民共楽の園地として整備した、(4)十七勝十六景を定め和歌や漢詩を依頼するなど名所づくりをした、などが研究で指摘されています^{※3,5,6}。また、江戸時代に描かれた絵図には、コウノトリやヒシクイなどの水鳥も多く描かれており、昔から多くの生きもののすみかであったと考えられます^{※7}。

地形や植生を活かした造園手法で農業用ため池と誉れ高い景観を創出し、かつ豊かな生物多様性を育む南湖公園は、200 年以上前から存在する紛れもないグリーンインフラと言えるでしょう。



1815 年の南湖公園の風景

『奥州白川南湖真景』乾, 小沢皆園 写, 明治 17. 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/9369913> (参照 2023-03-29) を加工して作成



現在の南湖の風景

- ※1 福島県観光客入込状況 令和3年分 福島県商工労働部観光交流局観光交流課
- ※2 進士五十八, 2005. 日本の庭園. 中央公論社, 東京.
- ※3 高塩博, 2001. 南湖の「土民共楽」と江戸の飛鳥山. 白河市歴史民俗資料館(編): 図録 特別企画展 定信と庭園 南湖と大名庭園, pp. 92-95. 白河市歴史民俗資料館, 白河.
- ※4 黒沢高秀・薄葉満・中野晋太・岡千照・伊藤将太, 2011. 史跡名勝南湖公園(福島県白河市)の雑管束植物相. 福島大学地域創造 22(2): 19-43.
- ※5 菅野義胤, 1948. 南湖園について. 造園雑誌 11: 7-10.
- ※6 菅野義胤, 1948. 樂翁公の自然観と作庭. 造園雑誌 12: 9-14.
- ※7 黒沢高秀, 2019. 奥州白川南湖真景に描かれた福島県白河市南湖の1816年当時の生物多様性と土地利用. 福島大学地域創造 30(2): 87-97.